今月のことば　　令和５年（2023）９月　＜No.205＞

「悪業」におしつぶされない

善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや。

―善人でさえ、阿弥陀仏の浄土へ救われていくのです。
ましてや、悪人が救われないことがありましょうか―

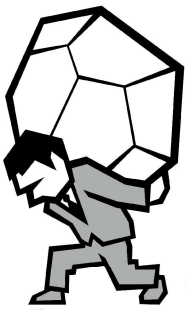
これは、あまりにも有名な『歎異抄』の一節。親鸞聖人がとなえた「悪人正機（悪人こそが阿弥陀如来の救いの対象である）」の教えを示すことばです。現代社会に生きる私たちだけでなく、親鸞聖人の時代（鎌倉時代）においても、これは違和感をもって受け止められることばでした。

しかし**ここで聖人が問題にしていたのは、「悪人とは誰か」ということ**です。

宗教思想史が専門の阿満利麿さん（明治学院大学名誉教授）は、夏目漱石の小説に出てくる登場人物のことばを例に、「悪人とは誰か」を考察しています。

君は今、君の親戚なぞの中に、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鋳型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。

平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。　　夏目漱石『こころ』　より



誰もが悪人であり、自分も「悪業（悪い行い）」から一歩も出ることはできないという事実。これはともすると「ニヒリズム」に陥ってしまう可能性があります。「どうせ悪人なら、どんな悪いことをしてもかまわないではないか」「そんな暗い人生なら、生きていても仕方がないのではないか」という、負の感情を持ってしまう可能性です。（『こころ』の登場人物は、その後、自死を選びます）

「だからこそ、念仏に出遇うことが大切である」と阿満さんはいいます。

NHK『こころの時代・歎異抄に出あう 第二回』より

私も自分自身の中で生涯を振り返ってみたときに、自分の人生は何であったのか、という連続ですよ。しかし、念仏と出遇えたという事だけは、確かですね。…

念仏をするということは、「私は仏になる道、つまり完全なる智慧というものが身につくような世界に向かって歩んでいる」ということなんです。…私は仏になる道を歩んでいるという確信があるが故にですね、悪業に負けずに生きていくことができる。…そのことは、自分の道徳的破綻とか、色々な問題ということに耐える、つまり以前よりそのことを客観的に見ることができる、そういう余裕が生まれてくる、ということだと思いますね。

念仏に出遇い、さとりの世界に生まれることを確信できるからこそ、自らの悪業におしつぶされず、悪人としての歩みの中にも明るさを見出しながら生きていくことができるのです。

慧日山　真光寺